

國學院大學學術情報リポジトリ

國學院大學図書館所蔵『新古今和歌集』酒井宇吉氏
旧蔵本下帖の解題と翻刻

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-07-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 荒木, 優也 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000668

國學院大學図書館所蔵

『新古今和歌集』 酒井宇吉氏旧蔵本下帖の解題と翻刻

荒木優也

前号では、酒井宇吉氏旧蔵『新古今和歌集』の上帖を翻刻、紹介した。本号は、引き続き下帖を翻刻、紹介する。下帖の詳しい書誌は、以下の通りである。

〈外 題〉 ナシ

〈内 題〉 新古今和歌集卷第十六

(卷十八〜廿は「和調集」。卷十七は内題部分落丁)

〈卷 冊〉 五卷一帖

〈保存状況〉 良好

〈体 裁〉 綴葉装。枳形本。

〈書写年代〉 鎌倉時代後期

〈表 紙〉 渋引表紙

〈表紙寸法〉 縦一五・六cm×横一六・四cm

〈字 高〉 一三・四cm

〈見返し〉 表紙共紙

〈二面行数〉 和歌本文二面十〜十三行。

〈丁 数〉 九折一〇三丁、うち遊紙首一丁尾一丁。

〈奥 書〉ナシ

〈印 記〉「國學院大學圖書館印」

〈 箱 〉印籠蓋箱（桐）

折毎の丁数は以下の通りである。

一折目（右8丁+表表紙、左8丁） 二折目（右6丁、左6丁） 三折目（右5丁、左5丁）

四折目（右6丁、左6丁） 五折目（右6丁、左6丁） 六折目（右6丁、左6丁）

七折目（右6丁、左6丁） 八折目（右6丁、左7丁） 九折目（右2丁、左2丁+裏表紙）

八折目左最終丁は、現在八折目に貼りつけられているが、本来は九折目の紙だったと考えられる。

酒井宇吉氏旧蔵本（以下、「酒井本」と略す）下帖は、筆者が上帖と違うものの、同じく鎌倉時代後期の書写である。本文の紙質には若干の違いを感じるもののほぼ同質、表紙は同じ渋引表紙であり、書写時、または早い時期から一緒に伝来してきたものと考えられる。本文は、卷十六〜二十の大半を取めるが、落丁などのため以下のように欠脱歌が多い。

● 卷十六（雑上） 一四九六〜九九（16丁と17丁のあいだ） 一五八六〜七（33丁と34丁のあいだ）

● 卷十七（雑下） 内題、一五八八〜二五九四（33丁と34丁のあいだ）

● 卷二十（釈教） 五二六〜五五〇（最終墨付丁102丁のあと）

本文の系統としては、上帖と同じく切継期の本文を反映している。切継期とは、『新古今和歌集』編纂途中の本文であり、定稿した『新古今和歌集』には収録されない、編纂段階で除かれた和歌（切り出し歌）が含まれる。酒井本下帖が有している切り出し歌は一九九四番歌の一首である（上帖には、一七九七・一七九八番歌の二首が認められる）。

また、下帖には、上帖に見られない選者名注記が「一・一二・三・四」と墨書されている。

書写態度としては、これも上帖と同じく必ずしも丁寧なものではなく、摺り消しや重ね書きが認められる。前号では、上帖の書写態度について「酒井本では、和歌が二行書きされているが、その改行は第三句と第四句の切れ目で行われているとは限らず、意味の切れ目でなされているわけでもない。特に法則性も認められない。これは、おそらく意味よりも筆跡の流麗さのほうが重視されたからであろう。脱字や確定しがたい文字が多く認められるのもそこに理由が求められる」と指摘したが、加えて、本文の意味を踏まえずに書写している可能性が考えられる。

たとえば、「延喜六年日大記寛宴(一八六五詞書)と「日本紀」を「日大記」と間違えるなど誤写と思われる箇所がある。また、「むめのはななほ(ふ)脱字)らん(二四四六)のように脱字が生じている箇所も多く認められる。こういった脱字は単なる不注意とも考えられるが、一八二四番歌の「すくる月日をうちかすへつ、」(過ぐる月日をうち数へつ)という例は書写態度のもう一つの性格を教えてくれる。「かすへ」は、正しくは「かそへ」であるが、親本では「数へ」と漢字があてられていたのを「かすへ」と読んでしまったのだろう。つまりは、書写態度として親本とは違う表記で写していることが確認できるのである。したがって、「あきかせのおとせさりせはしらつゆののきしのふにか、らましやは」(一七三三)の「のき(の)脱字)しのふ」は親本の表記が「軒忍」または「軒しのふ」、「あきかせはすこくふくらんくすはの」(一八二二)の「くす(の)脱字)はの」は「葛葉」または「葛は」だったものと考えられる。

こういった親本との表記上の違いから誤写や脱字が生じているとともに、「なにこと(はつ)もおとろへゆけと(二八四四詞書)のように「なにはつ(難波津)」と言い慣れた言葉を書いてしまい、あとから「なにこと」と本来の本文を写している場合も見受けられる。こういったところから、精確な書写とは言いがたい。

また、脱字や確定しがたい文字もあり、それらは後筆で補筆や「か歟（か）」と注記、校訂されている。ただし、この注記も歌全体の意味を考えずになされている場合がある。「みののうみか歟かなひはへらて」（二七七八詞書）は「う」と見える字を「か歟」と注記しているが、意味の通じる本文としては「みののそみ（身の望み）」が正しい。もちろん、これは現に書写されている字自体の判断をしたものとも考えられるが、注記全体が本文の意味を勘案してなされているものでは必ずしもないことを示している。

以上のことから、本典籍の本文を校合などで取り扱う際には注意を要すことが言えるだろう。

【凡例】

- 一 以下は、國學院大學図書館蔵『新古今和歌集』二帖（貴1856～57）のうち下帖の翻刻である。翻刻に際して、以下のような処理を施した。
- 一 行配りなど出来るだけ原本に近い形になるように示した。
- 一 歌の末尾に『新編国歌大観』の歌番号を（ ）で示した。ただし、切り出し歌に関しては「」で歌番号を示す。
- 一 漢字、仮名ともに通行の字体に改めたが、「哥」など一部原本の字体を尊重した箇所ある。
- 一 使用した記号は左記のとおりである。

（右傍浪線）……摺消（ ）内はもとの文字、（ ）がないものは不明。

（右傍直線）……重書（ ）内はもとの文字、（ ）がないものは不明。

（左傍直線）……見消

□……破損箇所。ただし文字が判読できるものは四角囲みでその文字を示した。

- 一 原本に見られる○で書かれた挿入符などは・に統一した。
- 一 当該本には、字形があいまいなため確定しがたい文字がある。その場合の多くは、本文右傍に後筆で「ゝか」と注記されるが、それ以外にも確定しがたい文字がある。そのため、稿者がもつとも近い字を示した横に（ゝカ）と丸括弧して注記したことがある。また、判読しがたい字は●で示した。
- 一 後筆で和歌や詞書が小書で補写されている場合、（*小書一行）と示した。
- 一 撰者名注記は、本来歌頭に記されているのが、本稿では歌番号の下に【】で示した。ない場合は×とした。

〈白 紙〉

としくれしなみたのつら、とけにけり
 こけのそてにもはるやとる覽タツ(1436) 【二三四】

土御門内大臣家に山家残雪と

いふこ、ろをよみはへりける

藤原有家朝臣

「(1オ)

やまかけやさらてはにはにあともなし

はるそきにける雪のむらきえ(1437) 【三四】

圓融院くらひみをりたまひ

てのちふるおかに子日し給

けるにまいりてあしたにたて

まつりける

「(1ウ)

あはれなりむかしの人をおもふにはき

のふの、へにみゆきせましや(1438) 【×】

御返事し 圓融院御哥

ひきかへて野へのけしきはみえしかと

むかしをこふるまつはなかりき(1439) 【×】

月のあかくはへりけるにそての

ぬれたりけるを

「(2ウ)

新古今和歌集卷第十六

雑詩上

入道前関白太政大臣家百首哥

よませはへりけるに立春のこ、

ろを

皇太后宮大夫俊成

大僧正行尊

はるくれはそてのこほりもとけにけり
もりくる月のやとるはかりに (1440) 【×】

鶯を

菅贈太政大臣

たにふかみはるのひかりのをそければ

雪につゝめるうくひすのこゑ (1441) 【一三三】 「〈3オ〉

梅

ふるゆきにいろまとはせるむめの

はなうくひすのこゑみやわきてしのはん (1442) 【二三】

枇杷左大臣の大臣になりては

へりけるよろこひ申とてむ

めを、りて

貞信公

おそくとてつゐにさきぬるむめのは

なたかうへをきしたねにかあるらん (1443) 【一三三】

延長のころをひに五位の藏人

に侍りけるをはなれはへりて朱

雀院承平八年又かへりなりて

あくるとしのむ月に御あそ

ひ侍ける日むめのはなを、
りてよみはへりける

源公忠朝臣 (*小書一行)

も、しきにかはらぬものはむめの花

をりてかさせるにほひなりけり (1444) 【一二三四】

むめのはなをみたまひて

花山院御哥

いろかをはおもひもいれすむめの花
「〈4オ〉

つねならぬよによそへてそみる (1445) 【一三四】

上東門院よをそむきたま

ひけるはる庭のこうはいをみ

はへりて

大貳三位

むめのはななに、ほらんみなる人の

いろをもかほもわかれぬるよに (1446) 【一三四】

東三・院女御におはしけると條き

圓融院つゐにわたらせたま

ひけるをきゝはへりてゆけいの
命婦のもとにつかはしける
「(4ウ)

東三條入道前攝政太政大臣

はるかすみたな引わたるおりにこそか
かるやまへはかひもありけれ (1447) 【二】

御返事 圓融院御哥

むらさきのくもにもあらてはるかすみ
たな引やまのかひはなにそも (1448) 【二】

柳を 菅贈太政大臣

みちのへのくち木のやなきはるくれは
あはれむかしとしのはれそする (1449) 【一 二 三 四】 (5オ)

題しらす 深養父

むかしみしはるはむかしのはるなから
わか身ひとつのあらずもあるかな (1450) 【二】

堀川院におはしましけるころ

閑院右大将の家のさくらをお
らせにつかはすとて

圓融院御哥

かきこしにみるあた人のいゑさくら
なちり(る)はかりゆきておらはや (1451) 【二】

御返事 右大将朝臣
「(5ウ)

をりにことおもひやすらはんはなさくら
ありしみゆきのはるをこひつゝ、 (1452) 【二】

高陽院にて花のちるを見て

よみはへりける

肥後

よろつよをふるにかひあるやとなれや
みゆきと見えて花そちりける (1453) 【二 四】

かへし 二條関白内大臣

ゑたことのすゑにてにほふはな、れは
ちるもみ・きと見ゆるなる覧 (1454) 【二 四】
「(6オ)

近衛つかさにてとしひさしく

なりまかれりけるによめる

藤原定家朝臣

はるをへてみゆ・になるゝはなのかけ
ふりゆく身をもあはれと思 (1455) 【四】

最勝寺のさくらをまりのか、

りにてひさしくなりにしをそ

の木としふりて風にたうれた

るをよしき、はへりしかはおの

こともにおほせてこときをそ

のあとにうつしうゑさせし時

まつまかりて見はへりければ

あまたのとしくくれにしはる

またたちなれにけることなど

おもひいて、よみはへりける

藤原雅経

なれくみてみしはなこりのはるそとも

なとしら川の花したかせ (1456) 【x】

建久六年東大寺供養に行幸

のとき興福寺のやえさくらさか

りなりけるをみてえたにむす

ひつけてはへりける

よみ人しらす

〔6ウ〕

ふるさとおもひなはてそはなさく

らかゝるみゆきにあふよなりとも (1457) 【四】

こもりてはへりけるころ後徳

大寺の左大臣白河のはなみにさ

そひはへりければまかりてよ

みはへりける

源師光

いさやまた月日のゆくもしらぬ身は

はなのはるともけふこそはみれ (1458) 【一四】

あつみのみこのもとに前大納

言公任の白河の家にまかりて

又の日みやのつかはしけるつ

かひにつけて申はへりける

和泉式部

をる人のそれなるからにあちき

なくみし我やとの花のかそする (1459) 【一】

題不知 藤原高光

みてもまたまたもみまくのほし

〔8オ〕

〔7ウ〕

かりしはるなのさかりはすきやしぬらん (1460) 【三四】

京極の前太政大臣家に白河院

みゆきしたまふて又の日は

なの哥たてまつりられけるに

よみはへりける

堀川左大臣

をひいにけるしらかはのはなもゝろもと

もにけふのみゆきにゆきもみえけり (1461) 【二】

後冷泉院御時御前にて甌新 「(8ウ)」

成櫻花といふこゝろをおのこともつ

かうまつりけるに

大納言忠家

さくらはなをりてみしにもかはらぬに

ちらぬはかりそしるしなりける (1462) 【二】

大納言経信

さもあらはあれくれ行はるも雲の

うへにちることしらぬはなしにほはゝ (1463) 【二】

無風散花といふことをよめる

大納言忠教 「(9オ)」

さくらはなすきゆきくはるのとも

とてとかせのおとせぬよにもちら／なん (1464) 【四】

鳥羽殿にてはなのちりかたな

るを御覽して後三条内大臣に

たまはせける

鳥羽院御歌

をしめともつねならぬよの花な

れはいまはこの身をにしにもとめん (1465) 【三】

よおのかれてのち百首哥よ

み侍けるにはなの哥とて 「(9ウ)」

皇太后宮大夫俊成

いまはわれよしの、山のはなおこそ

やとのものとも見るへかりけれ (1466) 【二三四】

入道前関白太政大臣家哥合に

はるくれはなをこのよこそしのは

るれいつかはかゝるはなをみるへき (1467) 【一四】

おなし家の百首哥合うた

てる月もくものよそにそゆきめく

るはなそこのよのひかりなりける (1468) 【×】

はるこ(の)ろ大乘院より人につか
「(10才)

しける 前大僧正慈圓

みせはやなしかのからさきふもとな

るなからの山のはるのけしきを (1469) 【×】

題しらす 西行

しはのとに、ほはむはなはさもあら

はあれなかめてけりならめしのみや (1470) 【一】

西行法師 (*小書一行)

世中を思えはなへてちるはなのわか

身をさてもいつちかもせん (1471) 【二三四】

東山にはなみにまかりはへ

るとでこれかれさそひける
「(10ウ)

をさしあふことありてと、ま

りて申つかはしける

安法々師

身はとめつこ、ろはおくる山さくら

風のたよりにおもひをこせよ (1472) 【三】

題不知 俊頼朝臣

さくらあさをふのうらなみたち

かへりみれともあかぬやまなしのはな (1473) 【一】

橘爲仲朝臣みちのおくにはへり

けるとき哥あまたつかはしける
「(11才)

なかに 加賀左衛門

しらなみのこゆともすえのまつ山は

はなとやみゆるはるのよの月 (1474) 【×】

おほつかなかすみたつらんたけく

まのまつのかまもるはるのよの月 (1475) 【×】

たいしらす 法印幸清

よをいとふよしの、おくのよふことり

ふかきこ、ろのほとやしるらん (1476) 【二】

百首譚たてまつりしとき

前大納言忠良

おりにあえはこれもさすかにあはれな

りをたのかはつのゆふくれのこゑ (1477) 【一】

「(11ウ)

千五百番哥合に

有家朝臣

はるのあめのあまねきみよをたの

むかなしもにかれゆくくさはもらすな (1478) 【三】

崇徳院にて林下春雨といふこ

とをつかうまつりける

八条前太政大臣

す^へえらきのこたかきかけにかくれても 「(12オ)

なをはるさめにぬれんとそ思 (1479) 【二】

圓融院くらゐさりたまひての

ち實方朝臣馬命婦とものかたり

しはへりけるところにやまふき

のはなを屏風のうへよりなけ

こしたまひてはへりければ

實方朝臣

と^(やカ)へなからいろもかはらぬやまふきの

などこゝのへにさかぬなりにし (1480) 【二】

御かへし

圓融院御哥

「(12ウ)

こゝのえにあらてやえさくやまふきの

いはぬいろをはしる人もなし (1481) 【二】

五十首の哥たてまつりし

とき 前大僧正慈圓

をのかなみにおなしすゑはそしほれ

ぬるふちさくたこのうらめしのみや (1482) 【四】

よをのかれてのち四月一日に

東門院大皇太后宮と申ける時

衣かへの御装束たてまつる

とて

「(13オ)

法城寺入道前太政大臣

からころもはなたのもとにぬきかへよ

われこそはなのいろはたちつれ (1483) 【二三】

御返事 上東門院

からころもたちかはりぬるはるの

よにかてかはなのいろをみるへき (1484) 【二三】

四月祭の日まてはなちりの

こりてはへりけるとしそのはな

を使少将のかさしにたまふに

かきつけはへりける

「(13ウ)

神よにはありもやしけんさくらはな

けふのかさしにをれるためしは(1485)

【一二三四】

いつきのむかしを思いて、

式子内親王

ほと、きすそのかみやまのたひまくら

ほのかたらひしそらそわすれぬ(1486)

【一二三四】

左衛門督家通中将にはへりけると

き祭使にてかむたちにとま

りてはへりけるあか月齋院の女

房のなかよりつかはしける

「(14オ)

よみ人しらす

たちいつるなこり・あけの月かけに

いと、かたらふほと、きすかな(1487)

【一二】

かへし 左衛門督家通

いくちよとかきらぬきみかみよなれと

なををしまる、けさのあけほの(1488)

【一二】

三条院御時五月五日昌蒲の

ねをほと、きすのかたにつ

くりてむめのえたにすゑて

人のたてまつりてはへりけ

るをこれ・たいにてうたつかう

まつれとおほせられければ

三条院女藏人左近

むめかへにをりたかへたるほと、きすこ

ゑのあや・もたれかわくへき(1489)

【一二】

五月はかりものへまかりけるみち

にいとしろくくちなしのはな

のさけりけるをかれはなに

のはなそと人にとひはへりけ

れと申さ、りければ

小辨

うちわたすをちかた人にこと、へは

こたえぬからにするきはなかな(1490)

【一二】

さみたれそらはれて月あかく

「(15オ)

「(14ウ)

侍けるに

赤染衛門

さみたれのそらたにすめる月かけに

なみたのあめははる、よもなし(1491)【一三】

述懐の百首哥中に五月雨

皇太后宮大夫俊成

〔15ウ〕

さみたれはまやの、きはのあまそ、き

あまりふる^なまでぬる、そてかな(1492)【二三三四】

たいしらす 花山院御哥

ひとりぬるやとのとこなつあさな〜な

みたのつゆにぬれぬひそなき(1493)【三】

贈皇太后宮にそひて春宮にさふら

ひけるととき少将義孝ひさしく

まいらさりけるになてしこのはなに

つけてつかはしける

恵子女王

〔16オ〕

よそへつ、みれとつゆたになくさま

すいかにかすへきなてしこのはな(1494)【二三】

月あかくはへりけるに人の

ほたるをつ、みてつかはし

たりければあめのふりけるに

つかはしける

和泉式部

おもひあらはこよひのそらはとひ

てましみえしや月のひかりな^るからん(1495)【×】

題しらす

七条院大納言

〔16ウ〕

みこのみやと申けるととき少納言藤

原統理としころなれつかまつり

けるをよそむきぬへきさまに

おもひたちけるけしきを御覧

して

三條院御哥

月かけのやまのはわけてかくれなは

そむくうきよをわれやなかめむ(1500)【二三四】

題不知

藤原為時朝臣

やまのはをいてかてにする月まつと

〔17オ〕

ねぬよのいたくふけにけるかな (1501) 【三】

法印静賢

参議正光おほる月よにしのひ

て人のもとにまかれりけるをみ

あらはしてつかはしける

伊勢大輔

うきくもはたちかくせともひま

もなくそら行月のみえもする哉 (1502) 【×】

返事

参議正光

うきくもにかくれてとこそおもひし

かねたくも月のひまもりにける(り) (1503) 【×】〔17ウ〕

三井寺にまかりてひころすき

てかへ覽としけるに人／＼なこり

を、しみてよみはへりける

刑部卿範兼

つきをなとまたれのみすとおもひ

けむけにやまのは、いてうかりけり (1504) 【二】

山さとにこもりゐてはへりける

を人のとひてはへりければ

おもひいつる人もあらしの山のはに

ひとりそいりしありあけの月 (1505) 【一三】

八月十五夜和歌所にておの

ことも哥つかまつりはへりしに

民部卿範光

わかのうらにいゑかけこそなけれども

なみふくいろは月にみえけり (1506) 【三四】

和哥所哥合に湖上月明といふ

ことを

宜秋門院丹後

よもすからうらくくふねはあとも

なし月そのこれるしかのからさき (1507) 【三四】

題しらす

藤原盛方朝臣

やまのはにおもひもつらしよのなかは

とてもかくてもありあけの月 (1508) 【四】

永治元年讓位ちかくなりて

よもすから月を見てよみはへ

〔18オ〕

〔18ウ〕

りける

皇太后宮大夫俊成

わすれしよわするなとたにいひて

ましくもゐの月のこゝろありせは(1509)【二二三四】(19オ)

崇徳院に百首哥たてま

つりけるに

いかにして袖にひかりのやとる覽

くもゐの月はへたて、し身を(1510)【一】

文治のころをひ百首哥よ

み侍けるに懷舊哥とてよめる

右近中将公衡

こゝろにはわする、ときもなかりけり

みよのむかしのくものうへの月(1511)【二三三】

百首哥たてまつりし和哥

二條院讃岐

むかしみしくもゐをめくる秋の月

いまいくとせかそてにやとらん(1512)【×】

月前述懷といへるこゝろをよめる

藤原経通朝臣

うきみよになからへはなを思ひいてよ

たもとにちきるありあけの月(1513)【二二三四】

石山にまうてはへりて月を

見てよみはへりける

藤原長能

みやこにも人やまつらんいしやまのみね

にのこれるあきのよの月(1514)【×】

題不知 射恒

あはちにてあはとはるかにみし月

のちかきこよひはこゝろからかも(1515)【×】

月のあか、りけるよあひかた

らひける人のこのころの月は

みるやといえりければ読る

源道濟

いたつらにねてはあかせともるともに

君かこぬよの月はみさりき(1516)【×】

よふくるまでねられす侍け

【19ウ】

【20ウ】

【20オ】

れは月のいつるをななめて

増基法師

あまのはらはるかにひとりななむれ
はたもとに月のいてにけるかな (1517) 【一三】

能宣朝臣やまとの國まつち

の山ちかくすみける女のもとに

よふけてまかりてあはさりけ

るをうらみ侍ければ

読人不知

たのめこし人をまつちのやま風に

さよふけしかは月もいりにき (1518) 【一】

百首哥たてまつりし時

攝政太政大臣

月みれといひしはかりの人はこてまき

のとた、くにはのまつかせ (1519) 【一】

五十首哥たてまつりしに山

家月のこゝろを

前大僧正慈圓

山さとに月はみるやと人はこすそら

ゆくかせそこのはおもとふ (1520) 【一二】

攝政太政大臣大将にはへりし時月

哥五十首よませはへりけるに

ありあけの月のゆくへをななめて

そ野てらのかねはきくへかりける (1521) 【一二四】

おなし家の哥合に山月のこゝろ

をよめる

藤原業清

やまのはをいて、もまつのこのまより

こゝろつくしのありあけの月 (1522) 【×】

和哥所哥合に深山暁月といふ

ことを 鴨長明

よもすからひとりみやまのまきのはに

くもるもすめるありあけの月 (1523) 【二一四】

熊野にまうて侍しときたて

まつりし哥の中に

藤原秀能

〔21オ〕

〔22オ〕

〔21ウ〕

おくやまのこのはをつる秋風に

たえくみねのくもそのこれる (1524) 【×】

「〈22ウ〉

月すめはよものうきくもそらにき

えてみやまかくれに行あらし哉 (1525) 【×】

山家のこゝろをよみはへりける

猷圓法師

なかめわひぬしはのあみとのあけか

たにやまのはちかくのこる月かけ (1526) 【三】

題しらす 花山院御哥

あか月の月みむとしもおもはねと

みし人ゆへになかめられつゝ (1527) 【×】

伊勢大輔

ありあけの月はかりこそかよひけれ

しる人なしのやとのよはにも (1528) 【×】

和泉式部

すみなれし人かけもせぬねや・とにあ

りあけの月のいくよともなく (1529) 【二三】

家にて月照水といへるこゝろを

人くよみ侍けるに

大納言経信

すむ人もあるかなきかのやとなから

あしまの月のもるにまかせて (1530) 【二三四】

あきのくれにやまひにしつみて

よをのかれはへりにける又のと

しのあき九月十余日月くま

なくはへりけるによみはへり

ける

皇太后宮大夫俊成

おもひきやわかれし秋にめぐりあひ

てまたもこのよの月をみむとは (1531) 【二三四】

題不知 西行法師

月をみてこゝろうかりしいにしへの

あきにもさらにめぐりあひぬる (1532) 【二三四】

よもすから月こそ袖にやとりけれ

むかしのあきをおもひいつれば (1533) 【二三】 「〈24オ〉

月のいろにこゝろをきよくそめま

しやみやこをいてぬ我身なりせは (1534) 【三】
 すつとならほうき身よをいとふしるしあ

らん我みはくもれあきのよの月 (1535) 【一二四】

ふけにける我身のかけをおもふまに

はるかに月のかたふきにける (1536) 【二四】

入道親王覺性

なかめしてすきにしかたを思まに

みねよりみねに月はうつりぬ (1537) 【二】

藤原道経

あきのよの月にこゝろをなくさめて

うきよにとしのつもりぬるかな (1538) 【二】 「(24ウ)」

五十首哥めしゝに

前大僧正慈圓

あきを邊て月をなかむる身となれり

いそちのやみをなにくらくらん (1539) 【×】

百首哥たてまつりしとき

藤原隆信朝臣

なかめてもむそちのあきはすき

にけりおもえはかなしやまのはの月 (1540) 【四】

たいしらす 源光行

こゝろある人のみ秋の月をみはなに

をうきみのおもひ出にせん (1541) 【×】 「(25オ)」

千五百番哥合に

二條院讚岐

身のうさに月やあらぬとなかむれは

むかしなからのかけそもりくる (1542) 【×】

世をそむきなんとおもひた

ちけるころ月をみてよめる

寂超法師

ありあけの月よりほかにたれをかは

山ちのともとちきりをくへき (1543) 【一三】

山さとにて月のよみやこを

思といへるこゝろをよみはへりける

大江嘉言

みやこなるなれたるやとにむなし

くやつきにたえぬる人かへる覧 (1544) 【三】 「(25ウ)」

なか月のありあけのころやま

〔26ウ〕

さとより式子内親王にをくれり

ける

惟明親王

おもひやれなにをしのふとなければとも

みやこおほゆるありあけの月(1545)【×】

かへし

式子内親王

ありあけのおなしなかも^は君もとへ

みやこのなかもあきのやまさと(1546)【×】

〔26オ〕

春日社哥合に暁月のこゝろを

攝政大政大臣

あまのとををしあけかたのくもまより

かみよの月のかけそのこれる(1547)【×】

右大将忠経

くもをのみつらきものとてあかすよの

月よ木・^すゑにをちかたの山(1548)【×】

藤原保季朝臣

いりやらてよを、しむ月のやすら

ひにほのくあくるやまのはそうき(1549)【×】

月あかきよ定家朝臣にあひ
て侍けるにうたのみちに心さし

ふかきことはいつは^{か敷}かりより

ことのことにかとたつねはへり

ければわかくはへりし時西行に

ひさしくあひともなひてき、

ならひはへりしよし申て其

かみまうし、ことなとかたりはへ

りてかへりてあしたにつかはし

たる

法橋行遍

あやしくそかへさは月のくもりにし

むかしかたりによやふけにけむ(1550)【×】

〔27オ〕

故郷月を

寂超法師

ふるさとのやともる月にこと、はむ

われをはしるやむかしすみきと(1551)【二三】

遍昭寺に月を見て

平忠盛朝臣

すたきけむ、かしの人はかけたへえ
てやともるものはありあけの月 (1552) 【一】

あひしりはへりける人のもと
にまかりたりけるにその人

はかりにすみていたうあれ
たるやとに|人月のさしいりて

はへりければ

前中納言匡房

やえむくらしけれるやとは人もなし
まはらに月のかげそすみける (1553) 【一三】

題しらす 神祇伯顯仲

かもめあるふちえのうらのおきつす
によふねいさよふ月のさやけさ (1554) 【四】

俊恵法師

なにはかたしほひにあさるあした
つも月かたふけはこゑのうらむる (1555) 【一四】

和哥所謂合に海邊月といふこ

とを

〔27ウ〕

前大僧正慈圓

わかのうらに月のでしをのさすま、に
よるなくつるのこゑそかなしき (1556) 【×】

定家朝臣

もしをく|さむそての月かけをのつからよ
そにあかさぬすまのうら人 (1557) 【×】

藤原秀能

あかしかたいろなき人のそてをみよ
す、ろに月もやとるものかは (1558) 【×】

熊野にまうてはへりし次に

切目の宿にて海邊眺望といへる
こ、ろを、のこともつかまつり

しに

源具親

なかめよとおもはてしもやかへる
らん月まつなみのあまのつりふね (1559) 【二】

八十におほくあまりてのち百首

哥めし、によみてたて

〔28ウ〕

〔28オ〕

まつりしに

皇太后宮大夫俊成

しもをおきていまやとおもふあきやまの

よもきかもとにまつむしのなく(1560)【一】

千五百番哥合に

あれわたる秋のにはこそあはれなれ

ましてきえなんつゆのゆふくれ(1561)【一四】

題しらす 西行法師

くもかゝるとほやまはたのあきされは

おもひやるたにかなしき物を(1562)【二】

五十首哥人くによませはへり

けるに述懐のこゝろをよみは

へりける 守覺法親王

風そよくしの、おさゝのかりのよを

おもふねさめに露そこほる、(1563)【一】

寄風述懷舊といふことを

左衛門督通光

あさちふや袖にくちにしあきの

しももわすれぬゆめにふく嵐哉(1564)【×】

皇太后宮大夫俊成女

くすのはのうらみにかへるゆめのよを

わすれかたみの野邊の秋風(1565)【×】

題不知

祝部成歌政仲

しら露はおきにけらしなみやきの、

もとあらのこはきすゑたはむまで(1566)【二二三】

法成寺入道前大政大臣おみなへしを

おりて哥よむへきよしはへ

りければ

紫式部

をみなへしさかりのいろをみるからに

つゆのわきける身こそしらるれ(1567)【一】

かへし 法成寺入道前大政大臣

白露はわけてもおかしをみなへし

こゝろからにやいろのそむらん(1568)【×】

題不知

曾祢好忠

山さとにくすはいかくるまつかきの

【29ウ】

【30オ】

ひまもなくものはあきそかなしき (1569) 【二】

あきのくれに身のおいぬるこ
とをおもひてよみはへりける

ナケキ
安法々師

も、とせのあらしはすくしきぬ

いつれのくれの露ときえなん (1570) 【×】

頼綱朝臣つのかのにつか

といふ所にはへりける時つかは

しける

前中納言匡房

あきはつるはつかの山のさひしきに

ありあけの月をたれとみるらん (1571) 【四】

九月はかりにす、きを崇徳

院にたてまつるとて読る

大藏卿行宗

はなす、きあきのすえはになり

ぬれはことそともなくつゆそこほる、 (1572) 【二】

やまことにすみはへりけるころ

あらしはけしきあした前

中納言顯長かもにつかはしける

後徳大寺左大臣

よはにふくあらしにつけておもふ

かなみやこもかくやあきはさひしき (1573) 【二】

かへし 前中納言顯長

よのなかにあきはてぬれはみやこ

にもいまはあらしのをとのみそする (1574) 【二】

清涼殿のにはにうへたま

ひけるきくをくらるさりた

まひてのちおほしいて、

冷泉院御哥

うつろえはこ、ろのほかの秋なれば

いまはよそにそきくのを露 (1575) 【四】

なか月のころの、みやに前栽う

へけるに 源順

たのもしなの、みやの人のうふるはな

しくる、月にあえずなりとも (1576) 【四】

〔31オ〕

〔30ウ〕

〔31ウ〕

題不知 読人不知

やまかはのいはゆく水もこほりして
ひとりくたくるみねのまつかせ(1577) 【×】

百首哥たてまつりしとき

土御門内大臣

あさことにみきはのこほりふみわ
けて君につかふるみちそかしこき(1578) 【×】 「〈32オ〉」

最勝四天王院障子にあふくま

かはかきたるところ

家隆朝臣

きみかよにあふくまかはのむもれ木
もこほりのしたにはるをまちける(1579) 【×】

元輔かむかしすみはへりける

家のかたはらに清少納言す

みけるころゆきいみしくふり

てたてのかきもたふれて

はへりければ申つかはし

ける

赤染衛門

あともなく雪ふるさとはあれに
けりいづれむかしのかきねなるらん(1580) 【一】 「〈32ウ〉」

御なやみおもくならせ給て

ゆきのあしたに

後白河院御哥

つゆのいのちきえなましかはかくは
かりふるしら雪をなかめましまは(1581) 【二】

雪よせて述懐のころ

をよめる

皇太后宮大夫俊成

そまやまやこすえにおもるゆきを
れにたえぬるけさの身をくたく／かな(1582) 【二四】

佛名の朝にけへりはなを御
覧して 【三三オ】

朱雀院御哥

ときすきてしもにきえにし花な

れとけふはむかしのこ、ちこそすれ(1583) 【二二】

【二二】

花山院をりるさせたまひ

て又のとし御佛名にけつり

はなにつけて申ける

前大納言公任

ほともなくさめぬるゆめのうち

なれとそのよに、たるはなのいる哉 (1584) 【三】

かへし

御形宣旨

見しゆめをいつれのよそとおもふま (1585) 【三】〔33ウ〕

はるのひのなからのほまにふねと

めていつれかはしと、へと・たえす (1595) 【二】

後徳大寺左大臣

くちにけるなからのほしをきてみ

れはあし(かカ)のうれはに秋風ぞ吹 (1596) 【二】

題不知

権中納言定頼

おきつかせよはにふくらしなには

かたあか月かけてなみそよすなる (1597) 【二二三四】

はるすまのかたにとまりて

よめる

藤原孝善

すまのうらのなきたるあさはめも

はるにかすみにまかふあまのつりふね (1598) 【×】〔34オ〕

天曆御時屏風哥

壬生忠見

あきかせのせきふきこゆるたひこ

とにこゑうちそふるすまのうらなみ (1599) 【二三四】

五十首哥よみてたてま

つりしに

前大僧正慈圓

すまのせきゆめをとをさぬな

みのをとをおもひもよらてやとをかり／ける(り) (1600) 【四】

和謔所哥合に関路秋風とい

ふことを

攝政大政大臣

人すまぬふわのせきやのいたひさ

しあれにしのちはた、あきの風 (1601) 【四】

明石浦をよめる

「〔34ウ〕

俊頼朝臣

あまをふねとまふきかへすうら風に

ひとりあかしの月をこそみれ (1602) 【二】

眺望のこゝろをよめる

寂蓮法師

わかのうらをまつのはこしになか

むれはこすゑによするあまのつり／ふね (1603) 【二二三四】

千五百番哥合に

正三位季能

みつのえのよしの、みやは神さひて

よはひたけたるうらのまつかせ (1604) 【三四】

海邊の心を

藤原秀能

いまさらにすみうしとでもいか、せん

なたのしほやのゆふくれのそら (1605) 【二三】

むすめの斎王にくしてく

たりはへりておほよとのう

らにみそきしはへるとて

女御徽子女王

おほよとのうらにたつなみかへら

すはまつのかはらぬいろをみましや (1606) 【二三】〔35ウ〕

大貳三位さとにいてはへりける

をきこしめして

後冷泉院御哥

まつ人はこゝろゆくともすみよしの

さとにとのみはおもはざるらん (1607) 【二】

御返し 大貳三位

すみよしの松はまつともおもほえて

きみかちとせのかけそこひしき (1608) 【二】

教長卿名所哥よませはへりける

祝部成仲

打よするなみのこゑにてしるき哉

ふきあけのはまのあきのはつかせ (1609) 【二】〔36オ〕

百首哥たてまつりし時海邊

哥 越前

おきつかせよさむに・なれはたこの

うらのあまのもしほひたきまさるらん (1610) 【二三四】

海邊霞といふこゝろをよみ

侍し 藤原家隆朝臣

みわたせはかすみまぬなみも歎のうちもかすみけり

けふりたなひくしほかまのうら (1611) 【二】

太神宮にたてまつりける

百首の中にわかれをよめる

皇太后宮大夫俊成

けふとてやいそなつむらんいせしまや

いちしのうらのあまのをとめこ (1612) 【×】

伊勢にまかりけるときよめる

西行法師

すゝか山うきよをよそにふりすて

ていかになりゆくわかみなる覧 (1613) 【一三】

題不知 前大僧正慈圓

よのなかをこゝろたかくもいとふかな

ふしのけふりを身のおもひにて (1614) 【二】

あつまのかたへ修行しはへりけ

るにふしのやまをみて

西行法師

風になひくふしのけふりのそらにきえ／て (1615) 【二四】

ゆくゑもしらぬわか思かな (1615) 【二四】

さ月のつこもりにふしのやまの

雪しろくふれるをみてよ

み侍ける

業平朝臣

ときしらぬ山はふしのねいつとてかか

のこまたらにゆきのふるらん (1616) 【二三三四】

題しらす 在原元方

はるあきもしらぬときはの山さと

はずむ人さへやおもかはりせぬ (1617) 【二】

五十首哥たてまつりし時

前大僧正慈圓

はなゝらてたゝしはのとをさしてお

もふこゝろのをくもみよしのゝ山 (1618) 【三四】

たいしらす 西行法師

〔36ウ〕

〔37ウ〕

よしの山やかていてしとおもふ身を
はなちりなはと人やまつらん (1619) 【二三四】

藤原家衡朝臣

いとひてもなをいとはしきよなりけり

よしの、おくのあきのゆふくれ (1620) 【二】

千五百番哥合に

右衛門督通具

ひとすちになれなはさてもすき

のいほによな／＼かはる風のをとかな (1621) 【×】

守覺法親王五十首哥よま

せはへりけるに閑居のこゝろを

よめる

有家朝臣

たれかはとおもひたえてもまつよ

のみをとつれてゆくかせはうらめし (1622) 【二四】

鳥羽にて哥合しはへりしに

山家嵐といふことを

宜秋門院丹後

やまさとはよのうきよりもすみわひぬ

ことのほかなるみねのあらしに (1623) 【四】

百首哥たてまつりしに

家隆朝臣

たきのをとまつのあらしもなれぬれ (1624) 【二二】

はうちぬるほどのゆめはみせけり (1624) 【二二】

題しらす 寂然法師

ことしけきよをのかれにしみやまへに

あらしのかせもこゝろしてふけ (1625) 【×】

少将高光横川にまかりて

かしらをろし侍りにけるに法

眼つかはすとて

権大納言師氏

おくやまのこけのころもにくらへみよ

いつれかつゆのをきまさるとも (1626) 【二四】

返事^し 如覺

白露のあしたゆふへにおくやまの (1627) 【三九才】

こけのころもは風もさはらす (1627) 【二四】

能宣朝臣大原野にまうて、

侍りけるにやまさとのいとあや

しきにすむへくもあらぬさ

まなる人の侍りければいつ

くわたりよりすむそと、ひ

はへりければ

読人不知

よのなかをそむきにとてはこしかと

もなをうきことはおほはらのさと (1628) 【四】

返し

能宣朝臣

身をはかつをしほのやまと思つ、

いかにさためて人のいりけむ (1629) 【一四】

ふかきやまにすみ侍りけるひ

しりのもとにたつねまかり

なりけるにいほりのとをとち

て人も侍らさりければかへる

とてかきつけゝる

惠慶法師

こけのいほりさしてきつれときみ

まさてかへるみやまのみちの露けさ (1630) 【一二三四】

ひしりみて・かへしのちに

あれはて、風もさはらぬこけの

いほにわれはなくともつゆはもりけむ (1631) 【一二三四】〔40オ〕

題しらす 西行法師

やまふかくさこそこゝろはかよふとも

すまてあはれをしらむものは (1632) 【四】

やまかけにすまぬこゝろはいかなれや

をしまれてゐる月もあるよに (1633) 【四】

山家送年といへるこゝろをよ

み侍ける

寂蓮法師

たちいて、つまきをりこしかたをかの

ふるき山ちとなりけるかな (1634) 【二三】

住吉哥合に山を

太上天皇

をくやまのをとろかしたもふみわ

〔40ウ〕

〔39ウ〕

けてみちあるよそと人にしらせむ (1635) 【×】

百首哥たてまつりし時

二条院讃岐

なからへてなをきみかよおまつ山の
まつとを^せしまにとしそへにける (1636) 【×】

山家松といふことを

皇太后宮大夫俊成

いまはとてつまきこるへきやとのまつ

ちよをはきみとなをいのるかな (1637) 【×】

春日哥合に松風といへることを

有家朝臣

われなからおもふかものをとほかりに

そてにしくるゝにはのまつかせ (1638) 【×】

山寺にはへりけるころ

道命法師

よをそむくところとかきくをく山は
ものをもひにそいるへかりける (1639) 【×】

少将井の尼大原よりいてたりと

きゝてつかはしける

和泉式部

よをそむくかたはいづくにありぬ

へしおほはらやまはすみよかりきや (1640) 【二三四】

返し 少将井尼

おもふことおほはらやまのすみかまは

いと、なけきのかすをこそつめ (1641) 【二三四】

題しらす 西行法師

たれすみてあはれしるらん山さとの

あめふりすさむゆふくれのそら (1642) 【二三四】

しほりせてなをやまふかくわけい

らむうきこときかぬところありやと (1643) 【三四】

殷富門院大輔

かさしをるみわのしけやまかきわけて

あはれとそおもふすきたてるかと (1644) 【二三四】

法輪寺にすみ侍りけるに人の

まうてきてくれぬとていそ

きはへりければ

「(41オ)

「(41ウ)

「(42オ)

道命法師し

いつとなきおくらのやまのかけをみて

くれぬと人のいそくなるかな (1645) 【三】

後白川院栖霞寺におはしま

しけるにこまひきのひきわ

けのつかひにてまいりけるに

定家朝臣

さかのやまちよのふるみちあとゝめて

またつゆわくるもち月・こま (1646) 【×】

なげくことはへりけるころ

知足院入道前関白太政大臣

さほかはのなかれひさしき身なれとも

うきせにあひてしつみぬるかな (1647) 【一】

冬ころ大將はなれてなげ

くことはへりけるあくるとし右

大臣になりてそうしはへりける

東三条入道前攝政太政大臣

かゝるせもありけるものをうちかはのたえ

ぬはかりもなけきけるかな (1648) 【一二三四】

御返し 円融院御哥

むかしよいたえせぬかはのすゑなれば

よとむはかりをなになげく覧 (1649) 【一三三四】

題不知 人磨

ものゝふのやそうちかはのあしろきに

いさよふなみのゆくゑしすもられす (1650) 【一三三四】

ぬのひきのたきみにまかり

て 中納言行平

わかよをはけふかあすかとまつかひの

なみたのたきといつれたかけむ (1651) 【二四】

京極前太政大臣ぬのひきの

たきみにまかりてはへり

けるに 二条関白内大臣

みなかみのそらにそみゆるしらく

ものたつにまかへるぬのひきのたき (1652) 【二】

最勝四天王院の障子にぬのひ

きのたきかきたるところを

〔42ウ〕

〔43オ〕

〔43ウ〕

有家朝臣

中務

ひさかたのあまつをとめかなつころも
くもゐにさらすぬのひきのたき(1653)【×】
あまのかはらをすくとて

攝政太政大臣

むかしきくあまのかはらをたつねきて
あとなきみつをなかむはかりそ(1654)【×】

題しらす 實方朝臣

あまのかはかよふうき、にこと、はむ
もみちのはしはちるやちらすや(1655)【一二二】

堀河院御時百・哥たてまつ
首

りけるに

〔44オ〕

前中納言匡房

まきのいたもこけむすはかりなりに
けりいくよへぬらんせたのなかはし(1656)【二三四】

天曆御時屏風にくくの所

のなをか、せさせたまひけるに
あすか、は

きためなきなにはたてれとあす

か、ははやくわたりしせにこそあり／けれ(1657)【二】

題しらす 前大僧正慈圓

やまさとにひとりなかめておもふか

なよにすむ人のこ、ろつよさを(1658)【二二三四】

西行法師

〔44ウ〕

山さとにうきよいとはむとも、かな

くやくすきしむかしかたらん(1659)【二三四】

やまさとは人こさせしとおもはねと、

はる、ことそうとくなりゆく(1660)【二三四】

前大僧正慈圓

くさのいほをいとひてもまたいか、

せんつゆのいのちのか、るかきりは(1661)【二三四】

宮こをいて、ひさしく修行し

はへりけるにとふへき人のとはす

はへりければくまのよりつ

かはしける

大僧正行尊
〔45オ〕

わくらははなとかは人のとはさらん
をとなしかはにすむみなりとも (1662) 〔二三〕

あひしれりける人のくまの
にこもり侍けるにつかはしける

安法々師

よをそむくやまのみなみの松風に
こけの衣もやよさむなるらん (1663) 〔二三四〕

西行法師百首哥す、め
てよませはへりけるに

家隆朝臣

いつか我こけのたもとに露おきて
しらぬやまの月をみるへき (1664) 〔一二四〕 〔45ウ〕

百首歌たてまつりしに山家
のこ、ろを 式子内親王

いまはわれまつのはしらのすきのいほに
とつへきものをこけふかきそて (1665) 〔一二四〕

小侍従

しきみつむ山ちの露にぬれにけり

あかつきをきのすみそめのそて (1666) 〔一二三四〕
攝政太政大臣

わすれしの人たにとはぬ山ちかなさ
くらはゆきにふりかはれとも (1667) 〔一二三四〕

五十首哥たてまつりしに

雅経

かけやとすつゆのみしけしなりはて、
くさにやつる、ふるさとの月 (1668) 〔三〕 〔46オ〕

俊恵法しみまかりてのちと

しころつかはしけるたき、
など弟子とものもとにつかはすと

て 賀茂重保

けふりたえてやく人もなきすみ
かまのあとのなけきをたれかこるら／ん (1669) 〔二〕

老後つのかくなる山てら
にまかりこもれりけるに寂

蓮たつねまかりはへりけるに

いほりのさますみあらしてあ

はれにみえはへりけるをかへりて

〔46ウ〕

てのちとふらひてはへりければ

西日法し

やそちあまりにしのみかへをまちかね

てすみあらしたるしはのいほりそ (1670) 〔二〕

山家哥あまたよみはへり

けるに

前大僧正慈圓

やまさにとひける人のことくさは

このすまひこそうらやましけれ (1671) 〔二三四〕

後白川院かくれさせ給て

のち百首哥に

式子内親王

をのゝえのくちしむかしはとをけれと

〔47オ〕

ありしにもあらぬよをもふるかな (1672) 〔二〕

述懐百首哥よみはへりけるに

皇太后宮大夫俊成

いかにせんしつかそのふのをくのたけ

かきこもるともよのなかそかし (1673) 〔三四〕

おいのゝちむかしを思ひはへり

て 祝部成伸

あけくれはむかしをのみそしのふ草

はずゑのつゆに袖ぬらしつる (1674) 〔三〕

たいしらす 前大僧正慈圓

おかのへのさとのあるしをたつぬれば

人はこたえす山おろしのかせ (1675) 〔二三〕 〔47ウ〕

西行法し

ふるはたのそはのたつきにゐるはと

のともよふこゑのすきゆふくれ (1676) 〔二三〕

やまかつのかたをか、けてしむるのゝ、

さかひにたてるたまのをやなき (1677) 〔二三四〕

しけき野をいくひとむらにわけな

してさらにむかしをしのひかへさむ (1678) 〔二三四〕

むかしみしにはのこまつにとしふり

てあらしのをとをこすゑにそきく (1679) 〔一〕

三井寺やけはへりてのち

すみはへりける房(をカ)お

もひやりてよめる

大僧正行尊

すみなれしわかふるさとはこのころ

やあさちか・はらにうつらなくらん (1680) 【四】

百首哥よみはへりけるに

攝政太政大臣

ふるさとはあさちかすゑになりは

て、月にのこれる人のおもかけ (1681) 【二三四】

西行法し

これやみしむかしすみこしあとならん

よもきかつゆに月の、これる (1682) 【二三四】

人のもとへまかりてこれかれ松

のかけにをりゐてあそひけ

るに

貫之

かけにとてたちかくるはからころも

ぬれぬあめとふるまつのごゑ哉 (1683) 【二】

西院のへんにはやうあひしれ

りける人をたつねはへりけ

るにすみれつみける女しらぬ

よし申ければよみはへり

ける

能因法し

いそのかみふりにし人をたつぬ

れはあれたるやとにすみれつみけ／＼ (1684) 【一二二】

ぬしなきやとを

恵慶法し

いにしへをおもひやりてそこひわたる

あれたるやとのこけのいははし (1685) 【一三三】

守覺法親王五十首哥よま

せはへりけるに閑居こゝろを

定家朝臣

わくらはにとはれし人もむかしに

てそれよりにはのあととはたへにき (1686) 【二三三】

〔48オ〕

〔48ウ〕

〔49オ〕

ものえまかりけるみちに山人

あまたあへりけるをみて

赤染衛門

「(49ウ)

なけきこるみはやまなからすくせ

かしうきよのなかになにかへるらん (1687) 【二三四】

題しらす 人麿

あきされはかり人こゆるたつた山

たちてもゐても物をしそ思 (1688) 【二三】

天智天皇御哥

あさくらや

きのまるとのに

わかをれ／は

なのりを

しつとゆくは

たか／こそ (1689) 【二三四】

「(50オ)

〈白 紙〉

新古今和詞集卷第十八

雑歌下

山 菅贈太政大臣

あしひきのこなたかなたにみちはあ

れとみやこえいさといふ人そなき (1690) 【二四】

日

あまのはらあかねさしいつるひかり

にはいつれのぬまかさえのこるへき (1691) 【二三】

月

つきことになかるとおもひしますか、

みにしのうらにもとまらさりけり (1692) 【二四】「(51オ)

雲

やまわかれとひゆく雲のかへりくる

かけみるときはなをたのまれぬ (1693) 【二四】

「(50ウ)

霧

きりたちててるひのとはみえす

とも身はまとはれしよるへありやと (1694) 【二三】

雪

はなとちりたまとみえつゝあさむ

けは雪ふるさとそゆめにみえける (1695) 【二三】

松

をいぬとてまつはみとりそまさりける

わかくろかみのゆきのさむさに (1696) 【二三四】

野

つくしにもむらさきをふるのへはあれと

おきなかなしふ人そきこえぬ (1697) 【二三】

道

かるかやのせきもりにのみみえつるは

人もゆるさぬみちえをりけり (1698) 【二三】

海

うみならずたゝへる水のそこまでに

きよきこゝろはつきそてらさん (1699) 【一三四】

かさ、き

ひこほしのゆきあひをまつかさ、き

のとわたるはしをわれにかさなん (1700) 【二】

波

なかれきとたつしらなみとやくしほと

いづれかかるらきわたつみのそこ (1701) 【三】

題しらす 読人不知

さ、なみのひらやま風のうみふけは

つりするあまのそてかへるみゆ (1702) 【一三三四】

しらなみのよするなきさによを

すみすみ敷つくすあまのこなれはやともさためす (1703) 【一三三四】

千五百番哥合に

攝政大政大臣

船のうち浪のしたにそおいにける

あまのしはさもいとまなのよや (1704) 【三】

題しらす 前中納言匡房

さすらふるみはさためたるかたもなし

うきたる舟のなみにまかせて (1705) 【四】

「52オ」

「52ウ」

増賀聖人

いかにせん身をうきほふ敷ねの木をおも

みついのとまりやいつくなるらん (1706) 【四】

人丸

あしかものさはいり江の水えの

よにすみかたきわかみなりけり (1707) 【一】 「53オ」

能宣朝臣

あしかものはかせになひくうき

くさのためなきよをたれかたのま／ん (1708) 【一】

なきさのまつといふことをよみ

侍ける

順

おいにけるなきさのまつのふかみとり

しつめるかけをよそにやはみる (1709) 【四】

山水をむすひてよみはへり

ける 能因法し

あしひきのやましたみつにかけみ

れはまゆしろたへにわれをいにけり (1710) 【二】 「53ウ」

あまになりぬとき、ける人に

さうそくつかはすとて

法成寺入道前攝政大政大臣

なれみてしはなのたもとをうちかへし

のりのころもたちそかへつる (1711) 【二四】

きさきにたちたまひけると

き冷泉院のきさいのみやの

御ひたひをたてまつりた

まへりけるを出家のときかへ

したてまつりたまふとて

東三條院

そのかみのたまのかさしをうち／かへし 「54オ」

いまはころものうらにたのまん (1712) 【二三】

返し 冷泉院太皇太后宮

つきもせぬひかりのまにもまきれな

ておいてかへれるかみのつれなさ (1713) 【二三】

上東門院出家の後こかね

のさうそくしたるちむのす

すしやかねのはこにいれて

むめのえたにつけてたてま

つられける

枇杷皇太后宮

かはるともころものいろをおもひやる

なみたやうらのたまにまかはむ (1714) 【二】

返し 上東門院

まかふらんころものたまにみたれつ、

なをまたさめぬこ、ちこそすれ (1715) 【二】

題しらす 和泉式部

しほのまによものうら／＼たつぬれは

いまはわかみのいふかひもなし (1716) 【二】

屏風の繪にしほかまのうらか

きてはへりけるを

一条院皇后宮

いにしへのあまやけふりてなりぬらん

人めもみえぬしほかまのうら (1717) 【二】

少将高光横川にのほりてかし

らをろしはへりにけるをきかせ

給てつかはしける

天曆御譚

みやこよりくものやえたつをくや

まのよかはのみつそすみよかる／らん (1718) 【二二三四】

御返し 如覺

も、しきの内のみつねにこひ／＼

てくものやえたつやま^はやすみうし (1719) 【二二三四】

よをそむきておのといふと

ころにすみはへりける業平

朝臣の雪のいとたかうふり

つみたるをかきわけてまう

てきてゆめかとおもふおも

ひきやとよみはへりけるに

惟喬親王

ゆめかともなにかおもはんうきよをは

そむかさりけんほとそくやしき (1720) 【四】

宮のほかにすみはへりけるこ

「55ウ」

「55オ」

ろひさしうをとつれさりける
人につかはしける

女御徽子女王

雲井とふかりのねちかきすまゐに／も
なをたまつさはかけすやありけん (1721) 【四】

亭子院おりゐたまはむとし
けるあきよみける

伊勢

白露はおきてかはれとも、しきの
うつろふあきはものそかなしき (1722) 【四】

殿上にはなれ侍てよみは
へりける

藤原清正

あまつかけ^せふけるのうらにゐるたつ
のなとかくもゐにかへらさるへき (1723) 【二三四】

二条院菩提樹院におはしま
してのちのはるむかしを

おもひいて、大納言経信ま

いりてはへりけるまたの日
女房つかはしける

よみ人しらす

いにしへのなれしくもゐをしのふ
とをかすみをわけてきみたつねけむ (1724) 【二】

最勝四天王院の障子に大淀かき
たる所 藤原定家朝臣

おほよとのうらにかりほすみるめたに
かすみにたえてかへるかりかね (1725) 【二】

最慶法し千載集かきて

たてまつりけるつ、みかみに
すみをすりふてをそめつ、
としふれとかきあらはせることの

はそなきとかきつけはへり
ける御返

後白川御歌

はまちとりふみをくあとのつもりなは
かひあるうらにあはさらめやは (1726) 【二】

「(56オ)

「(56ウ)

「(57オ)

上東門院高松院におはしま

しけるに行幸はへり・せきいれ

たる瀧を御覽して

後朱雀院御哥

たきつせに人のこゝろをみることは

むかしにいまもかわらさりけり (1727) 【二】

権中納言通俊後拾遺えら

ひはへりけるころまつかたはし

もゆかしくなと申てはへりけれ

は申あはせてこそとてまた

きよかきもせぬ本をつかはし

てはへりけるをかへしつかはずと

て 周防内侍

あさからぬこゝろそみゆるをとほ川

せきいれし水のなかれならねと (1728) 【二三】

歌たてまつれとおほせられけれ

は忠峯かなとかきあつめて

たてまつりけるをくにかき

つけゝる

壬生忠見

ことのはのなかをおくなたつぬれは (1729) 【二】

むかしの人にあひみつるかな (1729) 【二】

遊女のこゝろをよみはへりける

藤原爲方朝臣

ひとりゐてこよひもあけぬたれ

としもたのまはこそはこぬをうらみめ (1730) 【四】

大江舉周はしめて殿上ゆるさ

れて草子くさふかきにはにかきにはにをりて拜

けるをみはへりて

赤染衛門

くざわけてたちある袖のうれし

さにたえずなみたの露そこほる、 (1731) 【×】

あきころわつらひけるをこた

りてたひくとふらひける人に (1731) 【×】

つかはしける

伊勢大輔

うれしきはわすれやはするしのふく

さしのふるものをあきのゆふくれ (1732) 【×】

返し 大納言経信

あきかせのおとせさりせはしらつゆの

のきしのふにかゝらましやは (1733) 【×】

あるところにかよひはへりけ

るを朝光大将みかはしてよひと

よものかたりしてかへりてまたの

日 左大将濟時

しのふくさいかなるつゆかおきつらん

けさはねもみなあらはれにけり (1734) 【×】

返し 右大将朝光

あさちふをたつねさりせはしのふくさ

おもひおきけんつゆをみましや (1735) 【×】

読人不知

なからへんとしもおもはぬつゆのみの

さすかにきえんことをこそおもえ (1736) 【×】

返し 小馬命婦

露の身のきえはわれこそさきたゝめ
をくれんものかもりのしたくさ (1737) 【×】

題しらす 和泉武部

いのちさえあらはみつへきみのはてを

しのはん人のなきそかなしき (1738) 【一】

れいならぬことはへりけるにしれ

りける聖人のとふらひにまう

てきてはへりければ

大僧正行尊

さためなきむしかたりをかそふれは

わか身もかすにいりぬへきかな (1739) 【×】

五十首哥たてまつりしとき

前大僧正慈圓

よのなかのはれゆくそらにふるく

ものうき身はかりそをきところな／＼ (1740) 【四】

れいならぬ事はへりけるに無

動寺にてよみ侍ける

たのみこしわかふるてらのこけのし

「(60オ)

「(59ウ)

「(59オ)

たにいつしかくちむなこそをし／けれ (174) 【二四】

題不知 大僧正行尊

くりかへしわかみのとかをもとむれば

きみもなきよにめくるなりけり (1742) 【二三】

清原元輔

うしといひてよをひたふるにそむ

かねはものおもひしらぬ身とやなり／なん (1743) 【四】

讀人不知

そむけともあめのしたをしはな
〔60ウ〕

れねはいづくにもふるなみたなりけり (1744) 【四】

延岳御時女藏人内匠白馬館

会みけるにくるまよりくれな

るのきぬをいたしたりけるを檢

非違使のたゝむとしければ

いひつかはしける

女藏人内匠

おほそらにてるひのいろをいさめても

あめのしたにはたれかすむへき (1745) 【四】

かくいへりければたゝさすなり

にけり

れいならてうつまぎにこもり

てはへりけるにこゝろほそく

おほえければ

周防内侍

かくしつゝゆふへの雲となりもせば

あはれかけてもたれかしのはん (1746) 【二四】

題しらす 前大僧正慈圓

おもはねとよをそむかむといふ人の

をなしかすにやわれもなるらん (1747) 【二三四】

西行法し

かすならぬ身をもこゝろのもちかほに

うかれては又かへりきにけり (1748) 【二四】 〔61ウ〕

おろかなるこゝろのひくにまかせても

さてさはいかについのおもひは (1749) 【二三四】

とし月をいかてわかみにをくりけん

きふの人はけふはなきよに (1750) 【二三】

〔61オ〕

う敷
かけかたき人のすかたにうかひいて、

こりすやたれもまたしつむへき (1751) 【二三】

守覺法親王五十首哥よ

ませはへりけるに

寂然法師

そむきてもなをうきものはよなり

けり身をはなれたるこゝろならねは (1752) 【二二】

述懐のこゝろをよめる

身のうさを思ひしらすはいか、せん

いとひなからもなをすくるかな (1753) 【三四】

前大僧正慈圓

なにことをおもふ人そと人とは、こたへ

ぬさきにそてそぬるへき (1754) 【二三三】

いたつらにすきにしことやなけかれむ

うきかたきみのゆふくれのそら (1755) 【二三三】

うちたえてよにふる身にはあらね

ともあらぬすちにもつみそかなしき (1756) 【二二】

和哥所にて述懐心を

やまさとにちきりしいほやあれぬらん

またれんとたにおもはさりしほと (1757) 【×】 「62ウ」

右衛門督通具

そてにをく露をはつゆとしのへとも

なれゆく月をいろもしるらん (1758) 【×】

定家朝臣

きみかよにあはすはなにをたまのおの

なかくとまではをしまれしみを (1759) 【×】

家隆朝臣

おほかたのあきのねさめのなかきよ／も

きみをそいのる身を、もふとて (1760) 【×】

わかのうちやをきつしほあひにうか

ひいつるあはれわかみのよるへしらせよ (1761) 【×】

その山とちきらぬ月も秋かせも

す、むるそてにつゆこほれつ、 (1762) 【×】

雅経朝臣

きみかよにあへるはかりのみちは

あれと身をはたのますゆくすゑのそら (1763) 【×】

「63オ」

皇太后宮大夫俊成女

をしむともなみたに月もこゝろから

なれぬるそてにあきをうらみて (1764) 【×】

千五百番哥合に

攝政大政大臣

うきしつみこむよはさてもいかにそと

こゝろにとひてこたえかねぬる (1765) 【四】

題しらす

われなからこゝろのはてをしらぬかな

すてられぬよのまたいとはしき (1766) 【×】

をしかへしものをおもふはもるしきにし

らすかほにてよをやすきまし (1767) 【四】

五十首哥よみはへりけるに

述懐のこゝろを

守覺法親王

なからへてよにすむかひはなけれど

うきにかへたるいのちなりけり (1768) 【一二三】

権中納言兼宗

よをすつるこゝろはなをそなかりける

うきをうきとはおもひしれとも (1769) 【一二】 「64オ」

述懐のこゝろをよみはへりけ

る 左近中将公衡

すてやらぬわかみそつらきざり

ともとおもふこゝろにみちをまかせて (1770) 【二】

たいしらす よみ人しらす

うきなからあれはあるよにふるさ

とのゆめをうつゝにさましかねても (1771) 【×】

源師光

うきなからなををしまるゝいのち

かなのちのよとてもたのみなければ (1772) 【二三四】

賀茂重保

ざりともとたのむこゝろのゆくすへも

おもひはしらぬよにまかす覧 (1773) 【四】 「64ウ」

荒木田長延

つく／＼とおもえはやすきよのなかを

こゝろとなけくわかみなりけり (1774) 【一二】

入道前関白家百首哥よま

せはへりけるに

刑部卿頼輔

かはふねの、ほりわつらふつなてなは
 しくしてのみよをわたるかな (1775) 【二四】

題しらす 大僧都覺弁

をいらくの月日はいと、はやせかは
 かへらぬなみにぬる、そてかな (1776) 【二三】〔65オ〕

よみてはへりける百首哥

を源家長かもとにみせにつ

かはしけるをくにかきつけ

てはへりける

藤原行能

かきなかつことのはをたにしつむ

なよみこそかくても山川のみつ (1777) 【×】

みのか敷うみかなひはへらて

やしろのましらひもせてこ

もりゐてはへりけるにあふ

ひをみてよめる

鴨長明

みれはまついと、なみたそもろかつらい

かにちきりもかけはなれけむ (1778) 【二三四】

たいしらす 源季景

おなしくはあれはないにしへおもひい

てのなればとてもしのはすもなし (1779) 【四】

西行法し

いつくにもすまれすはた、すまてあ

らんしほのいほりのしはしなるよに (1780) 【二四】

月のゆくやまにこ、ろを、くりいれて

やみなるあとのみをいかにせん (1781) 【四】

五十首哥・中に

前大僧正慈圓

おもふことをそイなと、ふ人のなかるらん

あふけはそてらイに月そさやけき (1782) 【二三四】

いかにしていま、てよにはありあけの

つきせぬものをいとふこ、ろそ (1783) 【四】

〔65ウ〕

〔66オ〕

西行法し山里よりいて、むかし

出家しはへりしその月日に

あたりてはへるなど申たり

ける返事に

うきよいてし月日のかけのめぐり

きてかはらぬみちをまたてらすら／ん (1784)

【一四】

前僧都全真西國のかたには

へりけるときつかはしける

承仁法親王

〔66ウ〕

人しれすそなたをしのふこゝろをは

かたふく月にたくへてそやる (1785) 【四】

前大僧正慈圓ふみにてはおも

ふほとのこと申つくしかた

きよし申つかはしてはへり

ける返事に

前右大将頼朝

みちのくのいはてしのふはえそしらぬ

かきつくしてよつほのいしふみ (1786) 【×】

よのなかにつねになきころ

大江嘉言

〔67オ〕

けふまては人を・^なけきてくれにけり

いつ身のうゑにならんとす覧 (1787) 【二】

たいしらす 清慎公

みちしはのつゆにあらそふわかみかな

いつれかまつはきえむとすらん (1788) 【二】

皇嘉門院

なにかやかへにおふなるくさのな^よ

それにもたくふわかみなりけり (1789) 【二】

権中納言資實

こしかたをさなからゆめになしつれば

さむるうつゝのなきそかなしき (1790) 【二】

松の木のやけゝるをみて

性空聖人

〔67ウ〕

ちとせふるまつたにくつるよのなかに

けふともしらてたてるわれかな (1791) 【×】

俊頼朝臣

かすならてよにすみのえのみをつく
しいつをまつともなきよなりけり (1792) 【×】

皇太后宮大夫俊成

うきなからひさしくそよをすきに
けるあはれやかけしすみよしのまつ (1793) 【×】

春日社歌合に松風といふ事を

家隆朝臣

かすかやまたにのむもれ木くちぬ／らん
君につけこせみねのまつかせ (1794) 【×】

宜秋門院丹後

なにとなくきけはなみたそこほれ
けるこけのたもとにかよふ松かせ (1795) 【×】

さうしにあしてなかうたなど

かきてをくるに

女御徽子女子

みな人のそむきはてぬるよのなかに
ふるのやしろの身をいかにせむ (1796) 【一】

臨時祭の舞人にもろとも

はへりけるをともに四位しての
ち祭日つかはしける (1797) 【×】

實方朝臣

ころもてのやま井の水にかけみえし
なをそのかみのはるそかなしき (1797) 【二四】

かへし 道信朝臣

いにしへの山井のころもなかりせはわ
すらるゝみとなりやしなまし (1798) 【二四】

後冷泉院御時大嘗会にひか

けのくみをして實基朝臣の

もとにつかはすとて先帝の御時
思いて、そ^え・ていひつかはしける

加賀左衛門

たちなからきてたにみせよおみ

ころもあかぬむかしのわすれかたみに (1799) 【二四】

秋のよきり／＼すをきくといふ

たいをよめと人／＼におほせられ

て・^御とのこもりにけるあしたに

【一六九オ】

【一六八オ】

【一六八ウ】

そのよしのうたを御覽して

天曆御哥

あきのよのあか月かたのきりくす人
すてならてきかましものを (1800) 【×】

秋雨を

中務卿具平親王

なかめつ、我思ふことは日くらしに
のきのしつくのたゆるよもなし (1801) 【×】 「〈69ウ〉

題しらす

小野小町

こからしのかせにもみちて人しれす
うきことのはのつもるころ哉 (1802) 【×】

述懐の百首哥よみけるとき

紅葉を

皇太后宮大夫俊成

あらしふくみねのもみちの日にそえ
てもろくなりゆくわかなみたかな (1803) 【二四】

題しらす

崇徳院御哥

うた、ねはおきふくかせにおとろけと
なかきゆめちそさむるときなき (1804) 【二四】 「〈70オ〉

宮内卿

たけのはに風ふきよはるゆふくれの (に)

もの、あはれはあきとしもなし (1805) 【二】

和泉式部

ゆふくれは雲のけしきをみるからに
なかめしと思おもひこそつけ (1806) 【二】

くれぬめりいくかをかくてすきぬら／ん
いりあいのかねのつくくとして (1807) 【二三】

西行法師

またれつるいりあいのかねのをとすなり
あすもやあらはきかむとすらん (1808) 【二三四】

暁のこゝろをよめる

「〈70ウ〉

皇太后宮大夫俊成

あかつきのつけの枕をそはたて、き
くもかなしきかねのをとかな (1809) 【二四】

百首哥に

式子内親王

あかつきのゆふつけとりそあはれなる
なかきねふりをおもふまくらに (1810) 【二三四】

あまにならんと思たちけるを

人のと、めければ

和泉式部

かくはかりうきをしのひてなからへは

これよりまさるものをこそおもえ (181) 【三】

たいしらす

たち^{らちね}はなのいさめしものをつれくと

なかむるをたにとふ人もなし (182) 【一】

くまのえまいりておほみねへいらむ

とてとしころやしないたて、

はへりけるめのとのもにつかは

しける

大僧正行尊

あはれとてはく、みたてしいにしへは

よをそむけとは思はさりけむ (183) 【二】

百首哥たてまつりしとき

土御門内大臣

くらゐ山あとをたつねてのほれとも

こを思ふみちになをまよひぬる (184) 【四】

百首哥よみはへりけるに懷舊

哥 皇太后宮大夫俊成

昔^{むかし}たにむかしと思したらちねのなを

こひしきそはかなかりける (185) 【二三】

述懐百首歌読侍けるに

俊頼朝臣

さ、かにのいとか、りけるみのほとをお

もひ^え(え)はゆめの心地こそすれ (186) 【一】

ゆふくれに^{くも}雲のいとはかなげに

すかくをつねよりもあはれとて

僧正遍昭

さ、かにのそらにすかくもおなしこと

またきやともいよくかはへん (187) 【一二】

題不知 西宮前左大臣

ひとりまつえたにか、れる露のいのち

きえはてぬとやはるのつれなき (188) 【×】

野^きあしたるあしたにおさなき

人をたにとはさりける人に

「(71ウ)」

「(71オ)」

「(72オ)」

赤染衛門

あらくふく風はいかにとみやきの、

こはきかうへに人のとへかし (1819) 【二】

和泉式部みちさたにわすれ

てのちほとなく敦道親王かよふと

き、てつかはしける

うつろはてしはししのたのもりをみよ

かへりもそするくすかうらかせ (1820) 【二】

返し 和泉式部

あきかせはすこくふくらんくすはの

うらみかほにはみえしとそおもふ (1821) 【二】

やまひかきりにおほえはへりけ

るとき定家朝臣中將に轉任の

こと申とて民部卿範光かもとに

つかはしける

皇太后宮大夫俊成

をさ、はら風まつつゆのきえやらす

このひとふしをおもひをくかな (1822) 【二四】

〔72ウ〕

たいしらす 前大僧正慈圓

よのなかにいまはのこ、ろつくからにす

きにしかたそいと、こひしき (1823) 【二四】

よをいとふ心のふかくなるまゝに

すくる月日をうちかすへつ、 (1824) 【二三】

ひとかたに思とりにしこ、ろには

なをそむかる、身をいかにせん (1825) 【二三】

なにゆへにこのよをふかくいとふそと

人のとへかしやすくこたへむ (1826) 【三四】

おもふへきわかちのちのよはあるかなき

かなければ・このよにはすめ (1827) 【二三三】

西行法し

よをいとふなをたにもさはと、めをき

てかすならぬ身の思いてにせん (1828) 【二三四】

みのうさを思しらてや、みなまし

そむくならひのならきよひなりせは (1829) 【二三三】

いか、すへきよにあらはやは世をもすて、

あなうのよや・さらとに思はん (1830) 【二三三】

〔73ウ〕

なにことにとまるこゝろのありければ
さらにしも又よのいとほしき (1831) 【二三四】

入道前関白太政大臣 〔74オ〕

むかしよりはなれかたきはうき

よかなかたみにしのふなかなからねとも (1832) 【二三】

なけくことはへりけるころ大峯に

こもると同行とも、かたへは

京へかへりねたと申てよみは

へりける

大僧正行尊

おもひいて、もしもたつぬる人もあら

はありとないひそさためなきよに (1833) 【二三】

たいしらす

かすならぬ身をなにゆへにうらみ

けむとてもかくてもすくしけるよを (1834) 【×】〔74ウ〕

百首哥たてまつりしに

前大僧正慈圓

いつかわれみやまのさとのさくら木に

あるしとなりて人にとはれむ (1835) 【二四】

題しらす 俊頼朝臣

うき身にもや(まカ)みたのをしねをし

とめてよをひたすらにうらみわひぬる (1836) 【二三四】

としころ修行のこゝろありける

にすてかたきことはへりてすき

けるにおやなくなりてこゝろ

やすくおもひたちけるころ

障子にかきつけ侍ける

山田法師

しつのをのあさなめにこりつもの

しほしのほともありかたのよや (1837) 【二】

題しらす 寂蓮法師

かすならぬ身(はカ)うきものになしはて

つたかためにかはよをもうらみむ (1838) 【二三四】

法橋行遍

たのみありていまゆくすゑをまつ

人やすくる月日をなげかざるらん (1839) 【二】

〔75オ〕

守覺法親王五十首哥よま

せ侍けるに

源師光

〔75ウ〕

なからへていけるをいか^にてもと^にかまし

うきみのほとをよそにおもは、(1840) 〔二三〕

題しらす 八条院高倉

うきよをはいつるひことにいとへとも

いつかは月のいるか^たを^みん(1841) 〔三三四〕

西行法師

なさけありしむかしのみなをしの

はれてなからへは^まうきよにもふる哉(1842) 〔二三〕

清輔朝臣

なからへはまたこのころやしのはれむ

うしと見しよそいまはこひしき(1843) 〔二三四〕〔76オ〕

寂蓮人^くす、^みて百首哥

よませはへりけるにいなひは

へりてくまのにまうてける

みちにてゆめに^なに^こと(はつ)

もおとろへゆけとこのみちこ

そよ^そのすへ^そにかはらぬもの

はあれなをこのうたよむへき

よし別當湛快三位俊成に申

とみえはへりておとろきながら

この哥をいそきよみいたして

つかはしけるをくにかきつけ

はへりける

〔76ウ〕

西行法師

すゑのよもこの^な・さけのみかはらすと

みしゆめなくはよそにきかまし(1844) 〔二〕

千載集えらひはへりける時

ふるき人^くの哥をみて

皇太后宮大夫俊成

ゆくすへはわれをもしのふ人やあらむ

むかしをもしるこゝろならひに(1845) 〔一二〕

崇徳院に百首哥たてまつり

ける無常哥

おなし／こと

よのなかを思ひつらねてなかむれは
むかしをそらにきゆるしらくも (1846) 【二三三四】〈77オ〉

みやもわらやも

百首哥に 式子内親王

はてしなげ

くる、まもまつへきよかはあたしの、

れは (1851) 【二三三四】

すゑはの露にあらしたつなり (1847) 【×】

つのかくに、おはしてみきは

のあしをみたまひて

【78ウ】

花山院御哥

つのかくにのなからふへくもあらぬと^ね

もみしかきあしのねにこそあり／けれ (1848) 【二】

〈白紙〉

題不知 中務卿具平親王

かせはやみをきのはことにをく露の

をくれさきたつほとのはかなさ (1849) 【一四】

【78ウ】

蟬丸

【77ウ】

新古今和詞集卷第十九

あきかせに (の) なひくあさちのすゑ

神祇歌

ことにをくしらつゆのあはれよのなか (1850) 【二三三四】

しるらめやけふのねのかのひめこ^ひ

よのなかは

松をひんすゑまでさかゆへしとは (1852) 【四】

とてもかくても

この哥は日吉社司社頭のう

しろのやまにまかりて子日し

てはへりけるよ人のゆめに

みえけるになむ

なさけなくをる人つらしわかやとの

あるしわ(の)すれぬむめのたちえを (1853)

【×】

〔79オ〕

この哥は建久二年のはるの

ころつくしえまかれりけるも

もの、安楽寺のむめををりて

はへりけるよのゆめにみえけ

るとなん

ふたらくのみなみのきしにたう

たて、いまそさかへむきたのふちなみ (1854)

【二三】

このうたは興福寺の南圓堂つ

くりはしめはへりける時春日の

(社カ)
えのもとの明神よみたまへり

けるとなん

よやさむきころもやうすきかたそ

きゆきの・あひゆきのまよりしもやをくらん (1855) 【二三四】〔79ウ〕

住吉の御哥となん

いかはかりとしはへぬともすみのへの

まつそふた、ひをいかはりぬる (1856) 【四】

この哥はある人すみよしにま

うて、人ならばとはましものを

すみのえのまつはいくたひを

ひかはるらんとよみて

たてまつりける御返となん

いゑる

むつましときみはしらなみみつか

きのひさしきよ、りいはひそめて／き (1857) 【二三四】

〔80オ〕

伊勢物語に住吉に行幸の時を

むかみ下行したまひてと

しるせり

人しれすいまや／＼とちはやふる神さ

ふるまてきみをこそまで (1858) 【四】

此哥は待賢門院の堀川やま
とのかたより熊野へまうてはへ

りけるに春日へまいるへきよし

のゆめをみたりけれとのちに

まいらむとおもひてまかりすぎ

にけるをかへりはへりけるに

託宣したまひけるとなん

みちとをしほともほるかにへた

たれりおもひをこせよわれも／わすれし (1859) 【二三四】

このうたは陸奥にすみける人

の熊野へ三年まうてんと願

をたて、まいりてはへりけ

るにいみしく、るしかりければ

いまふた、ひをいかにせんとな

けきて御まへにふしたりける

よのゆめにみえけるとなん

おもふこと身にあまるまでなる

たきのしはしよとむるなにうら／むらん (1860) 【四】 (81オ)

此哥はみのしつめることをな
けきてあつまのかたへまか

らんとおもひたちける人熊

野の御まへに通夜して侍ける

ゆめにみえけるとそ

われたのむ人いたつらになしはては

またくもわけてのほるはかりそ (1861) 【二三四】

賀茂御哥となん

か、みにもかけみたらしの水のをもに

うつるはかりのこ、ろとをしれ (1862) 【四】

これ又賀茂にまうてたる人

のゆめにみえけるといへり

ありきつ、きつ、みれともいさき

よき人のこ、ろをわれわすれめや (1863) 【×】

石清水御哥といへり

にしのみたつしらなみのうへに／して

なにくすすらんかりのこのよを (1864) 【四】

此哥は稱徳天皇の御時和氣清
丸を宇佐宮にたてまつり給

へりける時託宣し給けるとなん

延喜六年日大記竟宴に神日本

磐余彦天皇

大江千古

しらなみにたまよりひめのこしことは

〔82オ〕

なきさやつゐにとまりなりけむ (1865) 〔二〕

猿田彦

紀淑望

ひさかたのあめのやへくもふりわけて

くたりしきみをわれそむかへし (1866) 〔二〕

玉依姫

三統理平

とひかけるあまのいはふねたつねて

そあきつしまにはみやはしめする (1867) 〔二〕

賀茂の社の午日うたひはへる

なる哥

やまとかもうみにあらしのにしふけは

いつれのうらにみふねつなかも (1868) 〔二四〕

神楽をよみはへりける

〔82ウ〕

貫之

をくしもにいろもかはらぬさかきは

のかをやは人のとめてきつらん (1869) 〔二四〕

臨時祭をよめる

みや人のすれるころもにゆふたすき

かけてこゝろをたれによす覧 (1870) 〔三〕

大将にはへりける時勅使にて大

神宮にまうて、よみはへりける

摂政太政大臣

神風やみもすそかはのそのかみにち

きりしことのすゑをたかふる (1871) 〔一四〕

おなしとき外宮にてよみける

〔83オ〕

藤原定家朝臣

ちきりありてけふみやかはのゆふ

かつらなかきよまでもかけてたのまん (1872) 〔一三四〕

公継卿勅使にて大神宮に

まうて、かへりのほりはへりけるに

斎宮の女房のなかより申を

くりける

よみ人しらす

うれしさもあはれもいかにこたへま
しふるさと人にとはれましかは (1873) 【×】

返し 春宮権大夫公繼 一 (83ウ)

神風やいすゝいはなみかすしらすゝ
むへきみよにまたかへりこむ (1874) 【×】

大神宮のうたのなかに

太上天皇

なかめはやかみちのやまに雲き
えてゆふへのそらをいてん月かけ (1875) 【×】

神風やとよみてくらはなひくして

かけてあふくといふもかしこし (1876) 【×】

題不知 西行法し

みやはしらししたついはねにし

きたてゝ露くももらぬひのみかけかな (1877) 【二二二】 (84オ)

神ちやま月さやかなるちかひあ

りてあめのしたをはてらすなりけり (1878) 【二三】

伊勢のつきよみのやしるに

まいりて月をみてよめる

さやかなるわしのたかねのくもるより
かけやはらくる月よみのもり (1879) 【×】

神祇哥とてよみ侍ける

前大僧正慈圓

やはらくるひかりにあまるかけなれや
いすゝかわらのあきのよの月 (1880) 【×】

公卿勅使にてかへりはへりける

いちしのむまやにてよみは

へりける

中院入道石大臣

たちかへりまたもみまくのほしき

かなみもすそかはのせゝのしらなみ (1881) 【二二】

入道前関白家百首哥読侍

けるに

皇太后宮大夫俊成

かみ風やいすゝのかはのみやはしらい

くちよすめとたてはしめけむ (1882) 【二二三】

俊恵法師

一 (85オ)

一 (84ウ)

神風やたまくしのはをとりかさ

しうちとのみやにきみをこそいのれ (1883) 【二三】

五十首哥たてまつりし時

越前

神風や山たのはらのさかきはに

こゝろのしめをかけぬひそなき (1884) 【二】

社頭納涼といふことを

大中臣明親

いすゝかはそらやまたきに秋のこゑ

し・つ^たいはねのまつゆふかせ (1885) 【×】

香椎宮のすきをよみはへ

りける

よみ人しらす

ちはやふるかしのみやのあやすき

は神のみそきにたてるなりけり (1886) 【二】

八幡宮の権官にてとしひさし

かりけることをうらみて御神

樂のよまいりてさかきにむす

ひつけはへりける

法印成清

さかきはにそのゆふかひはなけれども

かみにこゝろをかくるとをしれ (1887) 【×】

賀茂にまいりて

周防内侍

としをへてうきかけをのみみたらしの

かはるよもなきみをいかにせん (1888) 【二三】

文治六年女御入内の屏風に

臨時祭かけるところをよみ

はへりける

皇太后宮大夫俊成

月さゆるみたらしかはにかけみえ

てこほりにすれるやまあぬのそ／て (1889) 【二二三四】

社頭雪トイフコ、ロヲヨミハヘリケル(*小書一行)

按察使公通

ゆふしてのかせにみたる、おとさひ

てにはしろたえにゆきそつもれる (1890) 【×】

「(85ウ)」

「(86ウ)」

「(86オ)」

十首哥合の中に神祇を読む

前大僧正慈圓

君をいのるこゝろのいろを人とはゝた

たすのみやのあけのたまかき (1891) 【四】

みあれにまいりてやしろのつ

かさをのゝあふひをかけるによ

める 賀茂重保

あとたれしかみにあふひのなかりせは

なにゝたのみをかけてすきまし (1892) 【二】

社司ともきふねにまいりてあ

まこひしはへりけるついでに

よめる 賀茂幸平 (*作者名後筆か)

おほみたのうるをふはかりせき

かけてゐせきにおとせかほかみのかみ (1893) 【四】

鴨社哥合とて人ゝ読侍

けるに月を

鴨長明

いしかはやせみのをかはのきよければ

つきもなかれをたつねてそすむ (1894) 【四】

辨に侍ける時春日のまつりに

くたりて周防内侍につかはし

ける 中納言資仲

よろつよをいのりそかくるゆふたすき

かすかのやまのみねのあらしに (1895) 【二三】

文治六年女御入内屏風に春日

祭 入道前関白太政大臣

けふまつるかみのこゝろやなひくらんそ

てになみたつさほの河かせ (1896) 【二三三四】

家に百首哥よみ侍ける時

神祇のこゝろを

あめのしたみかさの山のかげならて

たのむかたなきことはしらすや (1897) 【二二】

皇太后宮大夫俊成

かすかのゝをとろのみちのむもれ水

すゑたにかみのしるしあらはせ (1898) 【二一三四】

大原野祭にまいりて周防内侍

〔87オ〕

〔88オ〕

につかはしける

藤原伊家

ちよまでもこゝろしてふけもみち

はを袖もをしほの山をろしの風(1899) 【三】 「(88ウ)」

最勝四天王院の障子にをし

ほ山かきたるところ

前大僧正慈圓

をしほ山神のしるしをまつのはに

ちきりしいろはかへるものは(1900) 【×】

日吉社にたてまつりける哥

中に二宮を

やはらくるかけそふもとにくもり

なきもとのひかりはみねにすめとも(1901) 【二三】

述懐のこゝろを

わかたのむなゝのやしるのゆふた／すき 「(89オ)」

かけてもむつのみちにかへすな(1902) 【二三四】

おしなへてひよしのかけはくもらねと

なみたあやしききのふけふかな(1903) 【二三】

もろ人のねかひをみつのはまかせに

こゝろすゝしきしてのをとかな(1904) 【二三】

北野よみてたてまつり

ける

さめぬれは思ひあはせてねをそな

く心つくしのいにしへのゆめ(1905) 【一三】

熊野へまうてたまひける時

みちに花のさかりなりけるを

御らんして

白川院御哥

さきにほふはなのけしきをみるそらに

神の心そゝらにしらるゝ(1906) 【三】

熊野にまいりてたてまつり

はへりし

太上天皇

いはにふす^ムこけのみならずみくまのゝ

山のかひあるゆくすゑもかな(1907) 【×】

新宮にまうつとてくまの

「(89ウ)」

かはにて

〔90オ〕

くまの川くたすはやせのみなれ

さほさすかみなれぬなみのかよひち (1908) 【×】

白河院熊野にまうてたまへ

りけるに御ともの人くしほや

の王子にてうたよみはへりけ

るに 徳大寺左大臣

たちのほるしほやのけふりうら風

になひくをかみのこゝろともかな (1909) 【二三三四】

熊野へまうてはへりしにいはい

しろの王子に人くの名なとか

きつけさせてしはし侍しに 〔90ウ〕

拜殿のなけしにかきて侍し

哥 よみ人しらす

いはしろのかみはしろらんしるへ

せよたのむうきよのゆめのゆくすゑ (1910) 【×】

くまの、本宮やけてとしの

中に遷宮はへりしにまいりて

ちきりあれはうれしきかゝるをり

にあひぬわするなかもゆくすへの／そら (1911) 【×】

かゝのかみにてはへりける時白山

にまうてたりけるを思いて、

日吉の客人の宮にてよみ侍

ける 左京大夫顕輔

としふともこしのしらやまわすれ

すはかしらの雪をあはれともみよ (1912) 【二】

一品聡子内親王すみよしに

まうて、人々うたよみ侍ける

によめる

藤原道経

すみよしのはままつかえに風吹はな

みのしらゆふかけぬまそなき (1913) 【二】

奉幣使にてすみよしにま

いりてむかしすみけるところ

のあれたりけるをみてよみ

はへりける

〔91ウ〕

津守有基

すみよしとおもひしやとはあれに

けりかみのしるしをまつとせしまに〔194〕〔×〕

ある所の屏風の繪に十一月神ま

つる家のまへに馬にのりて人の

ゆくところを

能宣朝臣

さかきはのしもうちはらひかれ〔92オ〕

すのみすめとそいのる神のみまへに〔194〕〔×〕

延喜御時屏風に夏神樂の心

をよみ侍ける

貫之

かはやしろ

しのにをり

はへほす衣

いかにほせばか

なぬかほす／らん〔195〕〔一三〕

新古今和調集卷第廿

釋教

なをたのめしめちかはらのさしもく

さわかよのなかにあらんかきりは〔196〕〔二三四〕

なにか思ふなにとかなげくよの中は

た、あさかほのはなのうへのつゆ〔197〕〔二四〕

此二歌は清水観音御哥となんいひ

つたへたる

智縁上人伯耆の大山にまいりて

いてなんとしけるあか月ゆめに

みえけるうた

やまふかくとしふるわれもあるもの

をいつちか月のいて、ゆくらん〔198〕〔四〕

なにはのみつてらにてあしの

そよくをきゝて

行基菩薩

あしそよくしほせのなみのいつま

〔92ウ〕

〔93オ〕

てかうきよのなかにうかひわたらむ (1919) 【四】

比叡山中堂建立の時

傳教大師

阿耨多羅三藐三菩提の佛達わか (93ウ)

たつそまに冥加あらせたまへ (1920) 【一二三四】

入唐時歌 智証大師

のりのふねさしてゆく身そもろく

の神も佛も我をみそなへ (1921) 【三四】

菩提寺の講堂のはしらにむし

のくひたりける哥

しるへあるときにたにゆけこくらく

のみちにまとへるよのなかの人 (1922) 【四】

日藏上人

寂寞のこけのいはとのしつげきに (94オ)

なみたのあめのふらぬひそなき (1923) 【四】

臨終正念ならんことを思ひて

よめる 法圓上人

南無阿弥陀ほとけのそてにかくるいとお

はりみたれぬこゝろともかな (1924) 【四】

題不知 僧都源信

われたにもまつこくらくにむまれなは

しるもしらぬもみなむかへてん (1925) 【二三】

天王寺のかめゐの水を御らんし

て 上東門院

にこりなきかめゐの水をむすひ

あけてこゝろのちりをすゝきつるかな (1926) 【二】

法華經廿八品哥合によせ侍ける

に提婆品のこゝろを

法成寺入道前撰政太政大臣

わたつうみのそこよりきつるほともなく

このみながらに身をそきはむる (1927) 【二】

勸持品のこゝろを

大納言●信

かすならぬいのちはなにかをしからん

のりとくほとをしのはかりそ (1928) 【二】 (95オ)

五月はかりに雲林院の菩提

講にまうて、よみはへりける

肥後

むらさきのくものはやしをみわた

せはのりにあふちのはなさきにけり

(1929) 【二三】

涅槃経に読侍りける時ゆめ

にちる花にいけのこほりもと

けぬなりはなふきちらすはる

のよのそらとかきて人のみせは

へりければゆめのうちにかへ

すとおほえける哥

「(95ウ)」

たにかはのなかれしきよくすみぬ

れはくまなき月のかけもつかひぬ

(1930) 【二三四】

述懐哥中に

前大僧正慈圓

ねかはくはしはしやみちにやすらひ

てか、けやせましのりのとほしひ

(1931) 【二三三】

とくみとりきくのしらつゆよるはを

きてつとめてきえんことをしそ思

(1932) 【二三】

こくらくへまたわかこ、ろゆきつかす

ひつしのあゆみしはしと、まれ (1933) 【二三四】

観心如月輪若在輕霧中の心

を 権僧正公胤

「(96オ)」

わかこ、ろなをはれやらぬあき、

りにほのかにみゆるありあけの月 (1934) 【二三四】

家に百首哥よみはへりける

とき十界のこ、ろをよみはへり

けるに縁覚の心を

攝政太政大臣

をくやまにひとりうきよはざとり

にきつねなきいろをかせになかめて (1935) 【二三四】

心経のこ、ろをよめる

小侍従

いろにのみそめしこ、ろのくやし

きをむなしと、けるのりのうれしき (1936) 【二三四】

攝政太政大臣の家百首哥に十

楽のこ、ろを読侍けるに聖

衆来迎楽

寂蓮法し

むらさきのくもちにさそふことの

ねにうきよをはらふみねの松風 (1937) 【二三】

蓮華初開楽

これやこのうきよのほかのはるなら

むはなのとほそのあけほのゝそら (1938) 【二二三四】

快樂無退楽

春秋もかきらぬはなにをくつゆは

をくれさきたつうらみやはある (1939) 【二三三四】

引攝結縁楽

たちかへりくるしきうみにをくあみ

もふかきえにこそこゝろひくらめ (1940) 【二二三】

法華経廿八品哥よみはへり

けるに方便品唯一乗法の心

を 前大僧正慈圓

いつこにも我がのりならぬのりやあ

るとそら吹風にとへとこたへぬ (1941) 【三】

化城喻品 化作大城郭

おもふなようきよのなかをいいて、

やとるおくにもやとはありけり (1942) 【×】

分別功德品 或住不退地

わしの山けふきくのりの道ならて

かへらぬやとにゆく人そなき (1943) 【×】

普門品 心念不空過

をしなへてむなしきそらを思ひ

しにふちさきぬれはむらさきの／雲 (1944) 【三】

水渚常不漏といふ心を

崇徳院御哥

●しなへてうきみはさこそなる／みかた

みちひるしほのかはるのみかは (1945) 【三】

先照高山

朝日さすみねのつゝきはめくめとも

またしもふかしたにのかけくさ (1946) 【三】

家に百首のうたよみはへ

りけるととき五智の心を

〔97ウ〕

〔98オ〕

妙觀察智 入道前関白大政大臣

そこきよくこゝろのみつをすま

さすはいかゝさとりのはちすをも／みんな (1947) 【×】

観持品 正三位経家

さらすとていくよもあらしいさやさは (198ウ)

のりにかへつるいのちとおもはむ (1948) 【二】

法師品 加刀杖瓦石 念仏故應忍

のこゝろを

寂蓮法師

ふかきよのまとうつあめにをとせずは (ぬ)

うきよをのきのしのふなりけり (1949) 【三】

五百弟子品 内秘菩薩行の心を

前大僧正慈圓

いにしへのしかなくのへのいほりにも

心のつきはくもらさらなん (1950) 【四】

人々すゝめて法文百首哥説

はへりける二乗但空智如螢火

寂蓮法師

〔99オ〕

みちのへのほたるはかりをしるへにて

ひとりやいつるゆふやみのそら (1951) 【一三四】

菩薩清涼月 遊於畢竟空

くもはれてむなしきそらにすみ

なからうきよのなかをめくる月哉 (1952) 【二】

梅檀香風 悦可衆心

ふく風にはなたちはなやにほふらん

むかしおほゆるけふのにはかな (1953) 【一二三四】

作是教已 復至他國

やまふかきこのもとことにちきりを

きてあたつきりのあとのつゆけさはかなさ (1954) 【二三四】

此日已過 命即衰滅

けふすきぬいのちもしかとをとろか

すいりあひのかねのこゑそかなしき (1955) 【二三】

悲鳴(勵カ) 痛戀本群

素覺法師

くさふかきかりはのををたちいて

とてもまとはせるしかそなくなる (1956) 【二】

〔99ウ〕

棄恩入無為 寂然法師

〔100才〕

そむかすはいつれのよにかめぐりあいて

思けりとは人にしられむ (1957) 〔三三四〕

合會有別離

源季廣

あひみてもみねにわかるゝしら雲

のかゝるこのよはいとはしきかな (1958) 〔二四〕

聞名歌往生 寂然法し

をとにきくきみかりいつるいきのま

つまつらんものをこゝろつくしに (1959) 〔三三四〕

心懷戀慕 渴仰於佛

わかれにしそのをもかけのこひしきを 〔100ウ〕

ゆめにもみえよやまのはの月 (1960) 〔三三四〕

十戒の哥よみはへりけるに不

殺生戒

わたつうみのふかきにしつむいさり

せてたもとかひあるのりをもとめ／よ (1961) 〔二四〕

不偷盜戒

皇太后宮大夫俊成

うきくさのひとはなりともいそかくれ

おもひなかけそおきつしらなみ (1962) 〔二二〕

不邪淫戒

さらぬたにをもきかうへにさよ衣も

わかつまならぬつまなかさねそ (1963) 〔二二〕 〔101才〕

不酤酒戒

はなのもとつゆのなさはほともあら／し

しいなすゝそはるのやまかせ (1964) 〔二二〕

入道前関白家に十如是哥

よませ侍けるに如是報

二條院讃岐

うきもなをむかしのゆへとおもはずは

いかにこのよをうらみはてまし (1965) 〔二二〕

待賢門院中納言人々にすゝ

めて廿八品哥よませはへりけ

るに序品廣度諸衆生其數

無有量の心を

〔101ウ〕

わたすへきかすもかきらぬはし／＼ら

いかにたてけるちかひなるらん (1966) 【一三四】

發心和諧集の哥普門品種
種諸悪趣

〔102ウ〕

美福門院に極樂六時讃の

ゑにかゝるへきよしうたゝてまつ

るへきよしはへりけるによみは

へりける時に大衆法を聞て弥

勤崑膽仰せむ

〈白紙〉

いまそこれいりえをみてもおもひこし

みたのみくにのゆふくれのそら (1967) 【一三四】〔102オ〕

〔103オ〕

暁到て浪の聲金の岸によ

するほと

〈白紙〉

いにしへのをのえのかねにゝたるかな

きしうつなみのあか月のこゑ (1968) 【一三四】

百首哥の中に毎日晨朝入

諸定のこゝろを

〔103ウ〕

式子内親王

しつかなるあか月ことにみわたせは

またふかきよのゆめそかなしき (1969) 【一三四】

